**聖霊降臨節第１主日・ペンテコステ礼拝説教　　　　　　　　　　　　　2023年5月28日**

**「故郷の言葉」**

**イザヤ書61章1節**

**61:1 主はわたしに油を注ぎ／主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして／貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み／捕らわれ人には自由を／つながれている人には解放を告知させるために。**

**使徒言行録2章1～13節**

**2:1 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、**

**2:2 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。**

**2:3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。**

**2:4 すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。**

**2:5 さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、**

**2:6 この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。**

**2:7 人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。**

**2:8 どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。**

**2:9 わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、**

**2:10 フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、**

**2:11 ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」**

**2:12 人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。**

**2:13 しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。**

**昨日の朝日新聞の「天声人語」に次のように記されてありました。**

**「“ふるさと”という言葉は、年齢を重ねるとともに、追憶とまじりあって心の奥深くまで染みこんでくる。＜兎追ひしかの山　小鮒釣りしかの川＞。日本の原風景をうたった『故郷』ほど、多くの人に愛される歌もないだろう。」**

**故郷、私たちにはそれぞれに故郷があります。今住んでいるところにはもちろんそれはそれで良さがありますが、故郷への思いというのはまた格別なものがあると思います。だからこそ「故郷」の歌を聞くと聞く人によってそれぞれに故郷は違えども何かこう心温まるものを感じると思うのです。故郷の山や海や畑や田んぼや夕焼けなどの景色、幼き頃の家族や友人との何気ない会話や日常生活、そういったものは年を重ねて忘れてしまうというよりは、年を重ねれば重ねるほどに美しい記憶としてよみがえってくるのではないかと思います。**

**私たちはそれぞれに今の生活がありますからだんだんと故郷に帰るということは難しくなり、いわゆるお国言葉は普段の生活ではあまり使わないと思います。それでも何かの用事で故郷の家族や親せきや友人に電話をして電話の向うがお国言葉、故郷の言葉であたりまえのように話すとその言葉に懐かしさを覚えると同時にこちらの方も普段は使わない故郷の言葉を当たり前のように使うとなんだかほっとするものです。**

**そういった感情になるのは、お互いがその故郷生まれだからでありまして、これがその故郷と全く縁もゆかりもない人が自分の生まれ故郷の言葉をいきなり流ちょうに話し出したら、それはびっくりします。たとえば私は三重県名張市生まれで故郷の言葉は大阪弁に近い言葉ですが、そんな私が旅行でしか行ったことがない青森の津軽弁を流ちょうに話し出したら、それは津軽の人はもちろんそうですがそれ以外の地方の人たちもそれは驚きでしかないわけなのです。そしてそれは普通に考えればありえないことです。でもそんなありえないことが今から約2000年前のペンテコステの日、教会がこの世に誕生した日に、エルサレムで起きたのです。故郷の言葉を聞くはずのない場所で聞き、語るはずのない人たちが故郷の言葉を語るのです。この出来事は一体何を意味しているのかを共に御言葉から聞いていきたいのです。**

**使徒たちはイエス様の約束の言葉を信じて待ちました。120人ほどが集まり心を合わせ**

**祈りを合わせてくじを引いてマティアを新しい使徒として選びました。マティアを選んで解散ではなくて、なおも一つとなって10日間祈り続けていたところ、イエス様の約束通りに聖霊が降りました。聖霊に満たされた使徒たちは、聖霊が語らせるままに他の国々の言葉で語り始めたのです。**

**使徒たちにとっては他の国々の言葉でしたが、聞いた人々にとってはそれは自分の故郷の言葉でした。5節には「さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいた」とあります。このユダヤ人たちは五旬祭のために各地から巡礼に来ていた人々というのではなく、かつてバビロン捕囚や様々な争いで各地に散らされて、何世代にもわたってその地に住み着いていたのですが、何らかの理由でユダヤのエルサレムに帰って来て、今はエルサレムに住んでいるユダヤ人です。さらにはユダヤ教への改宗者も異邦人であっても割礼などによりユダヤ人とみなされますから、そういった改宗者の人々も含まれるのです。**

**ユダヤ人や改宗者の人々がエルサレムに住んでいては決して聞くことがないはずの故郷の言葉を聞くのです。しかも語っているのはガリラヤ出身の使徒たちです。「話をしているこの人たちは皆ガリラヤの人ではないか」（7節）と言います。これは非常に軽蔑に満ちた言葉です。「異邦人のガリラヤ」と蔑まれたあの無知で無学なガリラヤの人ではないか。あんな無知で無学なガリラヤ人が私たちの故郷の言葉を語ることなどありえないし、あってはならない驚きの出来事なのです。**

**そして、故郷の言葉を聞いていた人々がなぜそこまで驚くかといいますと、語ることのできないガリラヤの使徒たちが流ちょうに自分の生まれ故郷の言葉を語っているからではありません。その語られている内容に彼らは非常に驚くわけです。11節後半にこうあります「彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」聖霊に満たされた使徒たちは神様の偉大な業を語っているのです。神様がこの世界を造られた天地創造の出来事から始まって、出エジプトの出来事、バビロン捕囚や捕囚からの帰還、神の民イスラエルの民を神様がいかに愛してくださっているか。民が背いても背いても神様が決して変わることなく愛し続けてくださった神様の大きな愛を語るのです。さらには、神様が独り子イエス様遣わしてくださり十字架の死と復活を通して偉大な愛の業を成し遂げてくださったその神様の偉大な愛を語るのです。神の福音を語るのです。それは、聞くはずのない故郷の言葉で語られる神様の偉大な業である福音が語られるの聞くのです。だからこそ驚き、とまどい、中には「新しいぶどう酒に酔っているだけだ」とあざける者もいるのです。**

**「故郷の言葉で福音が語られる」これがペンテコステに聖霊が降り教会が誕生した出来事において大切な事なのです。**

**9節から11節にかけて聞いたこともないようなカタカナの名前がいくつも出てきます。それは今はエルサレムに住むユダヤ人の故郷の地名のリストです。そしてこの故郷の地名のリストは秩序無く並べられているのではありません。ちゃんと意味があってこの順序なのです。**

**この地名のリストの中心は5番目のユダヤです。今使徒たちが福音を語り人々が福音を聞いている場所です。そのユダヤを中心にパルティア・メディア・エラム・メソポタミアこの4つがユダヤの東にある地方です。そして、カパドキア・ポントス・アジア・フリギア・パンフィリアがユダヤの北から北西にある地方です。そして、エジプト・キレネ・キレネに接するリビア地方がユダヤの南から南西の地方です。そしてローマは西の果てです。ユダヤ人とユダヤ教への改宗者は今ユダヤで使徒たちが語る福音を聞いている人々、クレタは西方の海洋民のこと、アラビアは東方の内陸民のことです。**

**これが何を意味しているかと言いますと、ユダヤを中心とした全世界の一覧表なのです。**

**ユダヤを中心として東・北から北西・南から南西・西の果てです。いわば東西南北全て、ユダヤ人も改宗者つまり異邦人も、海洋民も、内陸民も世界中全ての人が故郷の言葉で福音が語られるのを聞くのです。神様の偉大な業が自分たちの故郷の言葉で当たり前のように語られるのを聞く日がやがてやってくるということです。それは言い換えれば福音が全世界に世界中の隅々にまで伝わり広がっていくということです。**

**それはまさにイエス様が1：8で使徒たちに約束されたことが実現するのです。**

**「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」。**

**そのイエス様の言葉どおり聖霊に満たされた使徒たちによって福音が語られ、地の果てに至るまで、この世界の片隅でひっそりと静かに暮らす人々にも福音が届く日がやがて来るのです。世界中全ての人が故郷の言葉、それは自分の国の言葉で福音を聞くことができる日が来るというしるしなのです。それが、今から約2000年前のペンテコステの日の出来事の大切な意味なのです。**

**今、私たちはペンテコステ礼拝を行っています。何かわけのわからない外国語で礼拝を**

**行っているのではありません。私たちの故郷の言葉で、厳密には生まれた故郷の言葉ではありませんが、日本の国の言葉で礼拝を行っていいます。日本語で聖書を読み、日本語で讃美歌を歌い、日本語で福音が語られているのを聞いています。これは何か当たり前の様に思われるかもしれませんが、決して当たり前のことではありません。約2000年前のペンテコステの出来事があり、聖霊の力を受けた使徒たちが主の証し人として福音を宣べ伝えました。教会がそして教会に連なりイエス・キリストを救い主と信じる人々が福音を宣べ伝えました。幾多の困難がありました。多くの迫害を受け、多くの血が流されました。それでも人々は福音を宣べ伝え続けました。そうして、ユダヤからするとはるか東の果てのまさに地の果ての日本に福音が届けられたのです。**

**私たちの諏訪教会は1887(明治20)年にオランダ改革派のジェームス・バラ宣教師と稲垣信(いながきあきら)牧師が上田から和田峠を馬で越えて下諏訪に入り伝道を開始したことに始まります。中山道の中でも最大の難所と言われ、最大標高1531ｍの和田峠を越えるというのは、相当の覚悟がないとできないことです。諏訪の町に何としてでも福音を届けたいその熱い思いで足を進めていったのです。そのようにして諏訪の町に福音が届けられたのです。諏訪大社への信仰が根強いこの町での伝道は決して簡単なものではなかったことは容易に想像がつきます。それでもバラ宣教師と稲垣牧師は福音を語り続けたのです。1910（明治43）年諏訪教会が創立し、100年以上にわたってこの諏訪の地で福音を宣べ伝えています。今私たちがこうして礼拝を行っているのも決して当たり前な事ではなくて、なんとしてでも諏訪の地に福音を届けたいという熱い思いと何よりも聖霊の導きによってこの諏訪の地に福音が届けられたからです。そうして私たち一人一人に福音が届けられたからです。**

**これは本当に大きな恵みです。私たちはその大きな恵みの中で感謝をして神様を礼拝するのです。私たちの故郷の言葉で礼拝を守ることができる、日本語で聖書を読み讃美歌を歌うことができる、福音が語られるのを聞くことができる、これは本当に素晴らしい恵みなのです。**